

「21世紀COEプログラム」(平成14年度採択) 中間評価結果表

機 関 名	愛知大学	拠点番号	E 2 4
申請分野	学際・複合・新領域		
拠点のプログラム名称 (英訳名)	国際中国学研究センター (International Center for Chinese Studies)		
研究分野及びキーワード	〈研究分野: 地域研究〉(中国学)(中国政治論)(中国経済論)(中国法学)(中国社会学)		
専攻等名	中国研究科中国研究専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 加々美 光行 教授 他 14名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書（平成16年1月現在）を抜粋

<本拠点がカバーする学問分野について>

本拠点は通例地域研究と呼ばれた学際的分野のうち現代中国の総合的研究とその方法論的革新を目標とする。従来この分野には世界的に見ても統一した独自の方法論・学問基準が存在せず、現代中国学もその弊を免れなかった。このため本分野では世界規模での実りある学問的対話による発展が見られず、単に観察学（ウォッチング）にとどまる傾向を脱し得ずにきた。現代中国が世界に突出した発展を見せる今日、この現代中国学的方法的革新は決定的な重要性を持つ。

<本拠点の特色及びその目的等>

本拠点の特色は世界の中国学の主要センターをネットワークし、自らそのハブセンターとなって世界規模の学問対話の枠組を形成する点にある。まず遠隔多方向交流システムを本拠点と中国内2分拠点の間に構築、それを中核に世界の主要センターとの間で遠隔による定期的国際研究会を組織、その総括として年一回国際シンポを開催。教育面では世界の一線級研究者を動員した国際カリキュラムを編成、中国の分拠点との間で二重学位制を実施する。本拠点は研究教育面で現代中国学の学問的な世界統一基準を産み出すことに焦眉の必要を見ており、そこに本拠点が有する重要性もある。

<COEを目指すユニーク性>

類似した試みとして日本学の分野で国際日本文化研究センターがある。国際的な研究会を組織し、それを基礎とした国際シンポの開催も頻繁に行われている。しかしその働きは世界の個々の日本学研究者を集めるセンター機能にとどまっており、世界各地の日本学センターを組織として集中するハブセンター機能は担っていない。また、本拠点のように世界規模の研究方法論の革新を通じて学問的統一基準を産出することを旨とするものではない。さらに博士課程での二重学位の授与および遠隔多方向交流システムの常時使用は世界でも初めてである。

<本拠点のCOEとしての重要性・発展性>

現代中国学に限らず地域研究全般が、その誕生以来既存の諸科学たとえば政治学、経済学、文化人類学、民族学等の個々のdisciplineに依存し、地域研究独自の統一した方法論と学問基準をなお確立していない。この分野で世界規模の学問的対話が成熟しないのもそのためと言える。本拠点は現代中国学の研究教育の両面で世界規模の学問的対話を行う常設のフォーラムとして機能することで、この地域研究の現状の弊を打破するための重要な貢献をなす。この事業はまた対話の積分的な蓄積によってこそ目的を達するのであり、そこにまた本拠点の発展性もある。

<本プログラムの事業終了後に期待される研究・教育の成果>

- (1) 愛知大学、中国分拠点大学（中国人民大学・南開大学）の二重学位取得者の輩出。
- (2) 統一国際カリキュラムにより豊かな国際性を持ち、真の学問的対話能力を持つ有為の人材の輩出。
- (3) 現代中国学の方法論、政治、経済、文化、環境の各領域で世界規模をもってなされる5研究会の成果を出版。

<背景となる当該研究分野の国内外の現状と動向、期待される研究成果と学術的・社会的意義、波及効果等>

現代中国学分野では本国中国の自国研究が正当な学問評価を与えられていない。この分野の世界規模の学問対話の欠如、統一した方法論・学問基準の欠如もそこに起因する。本拠点は現代中国学の世界的ハブセンターとして本国中国の自国研究を重視しつつ継続的対話を通じた方法論の構築を目指す。それはひいては国内外の他の地域研究のセンターにも同様のハブセンター化への試みを生み出し、地域研究全体の方法論の革新と学問対話を呼び起こすと期待し得る。

機 関 名	愛知大学	拠点番号	E 2 4
拠点のプログラム名称	国際中国学研究センター		

◇ 21世紀COEプログラム委員会における評価

(総括評価)

当初目的を達成するには、下記のコメントに留意し、一層の努力が必要と判断される。

(コメント)

世界の中国学の主要センターをネットワーク化し、自らそのハブ的役割をすとの構想は、実質的にも進んでいると認められる。

但し、ネットワーク化された資料を使って、いかなる新しい方法論に基いて研究教育拠点を形成するのかが明らかではないので、その方向に向かっていっそう野心的な試みを進められたい。また、このプログラムの終了時点において、学術ネットワークの構築をどこまで具体的に構築するのかを示す必要がある。さらに、若手研究者の育成を含め、国際中国学の展開と人材育成との関係を、さらに具体的にされたい。